

東都八大家戲文

上編

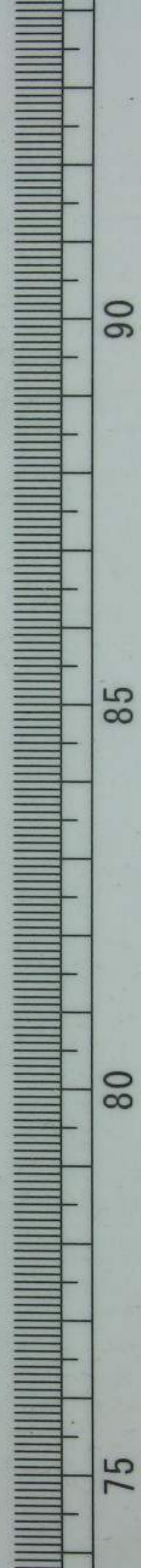
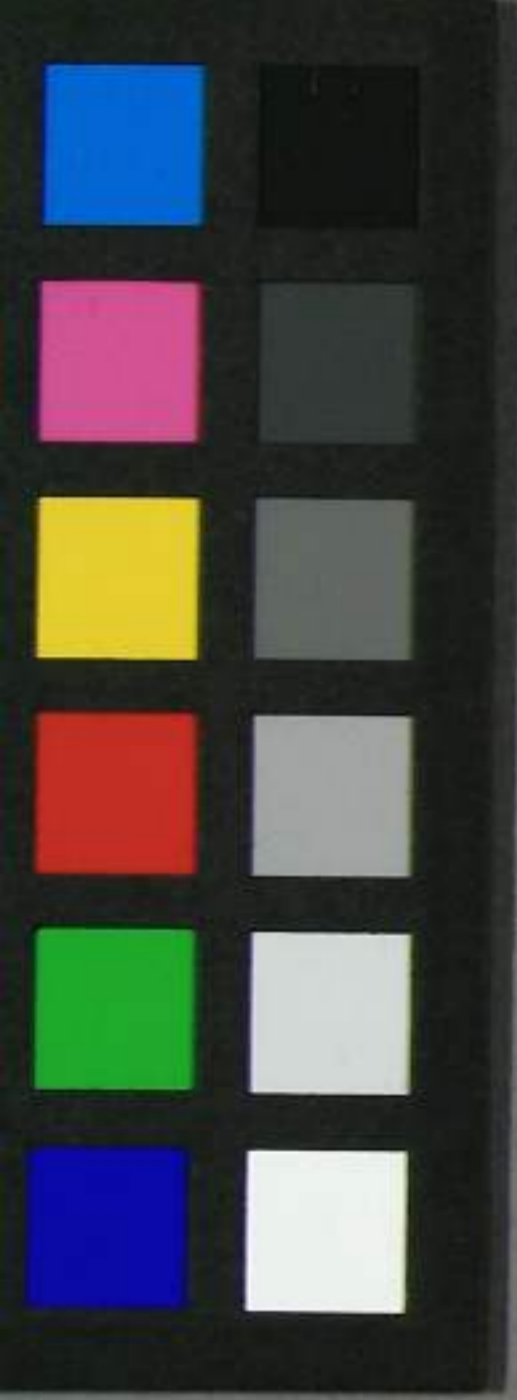
乾

西垣文庫

文庫10

6737

1



風來山人 蜀山人 十返舎九 山東京傳  
式亭三馬 曲亭馬琴 爲永春水 柳亭種彦

# 東都八大家戯文

上編 全三冊

書賈 凸凹堂藏版

自叙

東都八大家戯文稿成る書肆來りて序をもか  
けよと請へど  
も予篇々みな玉をつらねたるまへお泥れ如き文を掲ぐる  
い迷惑なりとてゆるさずされども書肆なか  
く死のすま  
て曰くそれ聖人の論語にも朱子れまくらあり高祖れまへ  
には陳涉のささげうあり芝居の幕明には仕出あれば先生  
にもせひに幕明あらんをせとせちに乞ふよよりて予遂  
にゆるしてさらば即席にちよっぴり書くべしとて筆をと  
りたれどもかぢけがつ死て更に思案がいでず墨を舐るこ  
と半時ばかりおて  
こそうすき硯れ水も去らすして  
鴨の眞似をするあらそ羽の文字

西河文庫

文庫10

6737

1

と書けば書肆傍よりきてそれと先生の御作にていやと問  
ふ予答へていな苦しいま、まちよつと古人の作を首に置  
てこれらら文をつゝくるなりといへば書肆あまりに待ご  
やなればそれにてよしといふゆゑさらば予も仕合ありと  
て筆を投それば書肆思案たらゝにて去りぬ

明治十五年十一月醉書といひたいが下戸なれば茶より  
りされて

春風居士

まゐるす



東  
八大家  
夜上編

四  
山  
嵐  
集  
五

○風來山人小傳

平賀氏名と國倫字ハ士彝通稱を源内といふ風來山人は其  
 号なり又外に天竺浪人鳩溪紙鳶堂福内鬼外等は數号あり  
 譚岐の産なり江戸に出と物直を學び田村元雄は門に入り  
 本草よくはしきを以て頗る名あり蘭學を旨として著書ま  
 た多々嘗て和蘭人の家にいたり去に蘭人一囊を出し衆に  
 示していはくよく囊口をひらく者あらばふれを贈るべと  
 と風來囊をとり立ちて開き去れば蘭人大に驚歎せ  
 りといふ風來又越歴機を傳へたり其事蓋一安永年中にあ  
 り緒餘又院本を作り神靈矢口渡等尤も世上に行はる



○蜀山人小傳

太田氏名は覃通稱之直次郎南畝と號し又蜀山人と號す其  
 他尙不數號あり世々徳川氏お仕ふ寛政に初昌平豊に於て  
 學問吟味に應じ甲科に賞を得たる學者なり玄が晩年は世  
 を玩びて狂歌を嗜み口を衝て出るものことく人を玄  
 て願を解まめ又世を諷玄俗を諷すに足る者おなし當時稱  
 して無雙に才子とせり擢らきて幕府司計吏とありたきご  
 も性淡泊より俗務に拘ららず嘗て竹橋官廨に蓄ふると  
 ゐるの古簿記の調査を命せられ玄が時適々五月の交に  
 て梅雨蕭々たりし狂歌を詠じて曰く五月雨や日もた  
 け橋に反故まらべ今日もふるてふ明日も古帳其滑稽洒落  
 大率この類なり墓は駒込本念寺あり



松久吟光

○式亭三馬小傳

菊地氏名は久徳、字は太軒、通稱を西宮太助といふ式亭三馬は其号なり父の八丈息なる爲朝神社の祠官菊地某の子菊地茂兵衛といふ三馬江戸淺草田原町に生る幼にして奇才あり十八歳に時より戯作書を著し其名都鄙に聞ゆ其住居一ならずといへども後本町二丁目に移り軒を商家に並べ樂を鬻ぐを以て業と之巧に世を紙筆の間に玩べり文政五年病よりりて没し享年四十七歳なりと云いへり其墓は深川雲光院あり本町葎、四季亭、洒落齋、哆囉哩樓、遊戯堂等みなそれ別号なり



○曲亭馬琴小傳

馬琴氏は瀧澤通稱は瑣吉後清右衛門と改む其先三河に出づ曾祖名の興也といふ者武藏國埼玉の人真中全直の次子興吉を養ふて嗣となす真中は源頼政の勇臣猪俣太守資より出づ興吉の子興義兵法に通じ撃劍射騎をよくそ馬琴之其季子なり少ふまて書を讀み長して著作を好み自ら其堂を名づけて著作堂といふ寛政二年の冬書雙紙二卷を編て刊行せしが書を著すの始めにして此時と二十四歳なりといへり終身編む所れ書殆ど三百種に及ぶ其没年と嘉永元年十一月にして享年八十二歳なりしといふ其望民といふと文政年中剃髮せし後れ稱なり

東八大家戲文上編乾目次

- 細見嗚呼御江戸序
- 豆男畫卷序
- 送麻疹神表
- 再編胡蝶物語序
- すり小木のことば
- 道中膝栗毛序
- 契情四十八手叙
- 風月春告鳥の序
- 花情春告鳥の序
- 麥飯序
- 道外物語序
- 客考評制記跋
- 道行風の妹脊筋
- 烏亭馬馬七袂壽詞
- 浮世風呂大意
- 青樓晝夜の世界錦裏序

風來山人  
蜀山人  
式亭三馬  
曲亭馬琴  
蜀山人  
十返舎一九  
山東京傳  
爲永春水  
風來山人  
式亭三馬  
全  
風來山人  
蜀山人  
式亭三馬  
山東京傳

- 太平樂卷營序
- 書畫帖序
- 淋疹戲言跋
- 戲子名所會序
- はこいり 嗽石香口上 代作
- とみがき 雙蝶記序
- 風流庵報條 代作
- 神靈矢口渡跋
- 飲酒法令
- 傾城扇
- 心猿辨
- 猿寺禪師七下賀詞
- 放屁詞自序
- 通言綱籙序
- 十八羅漢圖讚序
- 雜談紙屑籠序
- 坐敷藝忠臣藏序

- 風來山人
- 蜀山
- 式亭三馬
- 曲亭馬琴
- 風來山人
- 山東京傳
- 式亭三馬
- 風來山人
- 蜀山
- 山東京傳
- 蜀山
- 曲亭馬琴
- 風來山人
- 山東京傳
- 十返舎一九
- 山東京傳

東八大家戲文上編乾

春風居士選

○細見嗚呼御江戸序  
 女術女を見るに法あり一に目に二に鼻すぢ三に口四にえ  
 ぎと膚は凝る脂のこと一齒之軋扉のごと一家くの風好  
 く顔尻の見や字親指の口傳ありてふれを撰むと等閑  
 ならねと牙あるものは角かく柳れ翠なるれ華なく智ある  
 り醜く美し死に馬鹿あり静なるははりなく賑なれば死や  
 んなり顔と心ど風俗と三拍子揃ふれ中座となり立者と  
 呼る人の中よ人なく女郎れ中よ女郎まれなり貴かな得が  
 たさりな或は骨太毛むくじやれ狹首獅子鼻柵尻虫喰栗の  
 つゝくるも引け四ツの前後に至れば餘つて捨るは一一人



もなく廣いところがア、お江戸なり

○豆男畫卷序

蜀山人

伊勢物がたりのまゆ男はまゆやかなる男なるべきを形れ  
ちひさき豆またとへて色事の腕豆まゆかきなせしと一  
合八文舎れさはふれにして大通豆の世れこととさなる青  
豆の青黛黒豆の黒仕立枝豆枝をかとし羽根をならふる  
鴈くひ豆も鬼うち豆のどまをかされて座禪まゆのさと  
をひらく豆右衛門れむかしがたりを鳥文齋の筆まゆえ  
が、れま一卷よわが口豆れ序をそへよと豆のまゆがら七  
あのみ七里のへりてくふみそ豆にそらまゆのそらごとを  
まじへてまゐるす

○送麻疹神表

式亭三馬

春はをし郭公はたさかまをし思ひわづらふ色のふけふか  
などよとさる歌又はひき風のひさかたりくこと一の夏の  
はじめの頃より男と女となくとまの程三そぢよそふらこ  
これらの人々寐るをし醫者の薬のさるまはしはしわ  
づらふたのふけふるなどちうめきつ、呑食ふもの味ひ  
だふさらにまらぬひのつくねんとた々十二日のひだれを  
のみを指をりめてぞ打伏けるそれさま貴色賤きれわか  
ちもなく上玉だれの小簾のひまもる升麻劑の匂ひ奇南  
れ香よりも高くうけり下はあやしの馬追ふをのこまで咽  
喉のしとがれさる聲作りして竹よ雀はまなよくとまると  
めてとまらぬ咳嗽をなん苦まけるう、れば三戯場のやく  
ら幕も發熱の汗と、もにいさづらにまなり上れば金主の

頭痛の煤鱈人れ炙魚的と俱小大抹額のあはきあるさまな  
 り貨食者麩家も麻疹に付経商体れ招状を出し段正舖にも  
 かあいくの聲絶る中にいりなれば又貨郎店を出す者の  
 許多ぞやその甚しき事小戸大戸をいはずはそ是をかぞへなば  
 まことよとく程とふそいふべけれ湯屋の管長ハ常の居眠  
 に増を加へ出入れ髪頭家の思ひ外に廻る事速なり祈禱  
 の法印の呪術れ守護を出せば五社の廟官劣らじと護符を  
 施す或ハ名方を書く廣るあれば或は禁忌を寫てとらす  
 もありて麻疹の猛威いよくご盛んよかはしまそ物から  
 傾城の哀なるや鼻衄の夥しきを見くは貯藏れ起請をも  
 ろまくたもひ彩粉房に浮説のまても嫖客と噴嚏をそるれ  
 とにて都て通ひ來る者少し只麻疹訪安否の驛使のと晝

をたてくだまにくだーと護街の裏門魚鳥留れ禁物にさみ  
 るく楊橋橋坊は三絃の話もなくて藥研の音れまのまびす  
 玄藥材容の賑ふのみならず草澤醫も効を顯さんと麻疹精  
 要卒然に闇記じ葛根湯に休むひまなく時を得顔と誇ると  
 いへともことまは勝てよあみのよければ稚さものは鈴付  
 たる猴に杵めささるものをもてあそび付たとなまきもれ  
 もさせるくるまみもなければまめやうなる命定ともいふ  
 なるべし夫疥疹と天行の疫邪によりて發るとありて十二  
 支のめぐりれころにはやるよしを醫書にもいへり南人の  
 これを熱瘡といひ北人のこれを糠瘡といひ呉と痧疹とい  
 ひ越に瘡瘡といふは姓名なるり字號なるり俳名なるか表  
 徳あるかそも諡号あるりそも混名なるか孰れ本名紛一色

東 八大家戯文上編 卷八 三

病名なりとて我大御國のやまとたまひ些些な字義にと  
 かまひ申さぬと唯手がるくハカと訓じて通用す其舊古  
 此紀記を索るに稻目瘡とあり赤瘡とあるは今いふ麻疹  
 此事なるよ玄本居大人が説も見たり亦似物の痘瘡麻疹  
 といへとも侶ぬ物もまた痘瘡麻疹なるべ玄形容同ふ玄て  
 心お異なるをたとへ水仙と冬葱のこどく淨と譚又淨の  
 如しされとも世俗侶た物なれば是を菖蒲と杜若にたぐへ  
 て彼を媚定とし是を命定とそ麻疹は命定ふあらず痘瘡命  
 定なるべし夫とともあれ此ころの人は痘瘡鬼の合棚に麻  
 疹れ神れあるとまで心得けん源八も才陸も執り侍かれ玄  
 とおそれあへる片腹痛さ事なるとも玄ばらく俗にしたが  
 ひてさらば神ども申べけれど痘瘡神は棚に祭りて赤い盡

しをさらげ立木兔のお伽もあれど麻疹之神といふまで  
 て赤の飯れ沙汰もなく鴉の張籠も見へず神でもなれ物神  
 くくと利を付るたまのことも一の行童謠でこでもちいも  
 のでこくといふにひとしく何をもちく神とかいふや何  
 をもつてでことかいふや夢中でまらぬ俗物が初發の熱の  
 うはあどなるべ玄噫この夏いあな色ばあゝる天疫の災を  
 下まて吏民にくるしみをかけたまふぞ願くは天神地祇哀  
 愍のまなじりをたれたまひまこと麻疹れ神あらばそみや  
 かにちくらが汗へ送りたまへさらばおのれも御幣を振立  
 鐘と太鼓をうちならしてたくれくとちうらを合せ奉る  
 べし撫つさすり何看病人の丹精を抽て告奉る微志をそれ  
 見そなはし給へち、んぶいふんく

○再編胡蝶物語序

曲亭馬琴

復讎の稗史手を盡きてより、八九年作者のふれわれ、又倦て凝らねば、思按に能はずは、所為といへり。なから生活に二字に羈れて筆より外、とり得なれ、男子一疋に足らねども、五尺の軀を安然と日ぐらゝ、硯をひつゝ、兼好らしくも思はるゝ、見かけふゝの幸いならずや、されば柴火と音づる、書買も今又寡くらゝ、ば堂の園と長雪隠、奇い智囊を絞りに出でて、詰みながら、去年の暮わつさり、と氣をかへて、胡蝶物語を著したるに、落が氷さや、ら、板元の貌さへいと、春めきて、今茲も正月のはじめから、後編の催促は折々、耳に入るも、れ、一日、脱のなまけ日、和花曇より五月雨、れ、降みふらず、み、武佐墨の曲り形にも、こ

ちつけねば、盈前もはや遠く、らず、時ねば、生ぬ、藁本と爰に勉て、筆を起して、再編四冊を綴り、まゝ前後九巻の冊子となま、つ、信や河豚を嗜む者は、美味を賞まじ、中るを思はず、又稗説を編み、れ、之當るを、おもふて、苦心を厭はず、河豚も中る、ハ蝶ある、故なり、胡蝶のあたるは、板元の耳垂珠もある、なるべ、ま、からば、此書を、胡蝶と命る、河豚もあたる、の縁あり、ども、實ハ毒にも、藥にも、ならず、世の觀官に、居膳えて、板屋が削る、花堅魚も、板木師が、鑄る、鯛の目も、食ふが、爲の新板三味下戸、なれば、こそ、甘口な、寐酒の、猪口を、左手に、受て、亦、あ、の、編に、自序す、こゝに、ふ

○すり小木のこゝとば

蜀山人

もろこゝ、杭州の人は、日ごとに、三十文の、楯櫓を、くふといへ

りいはんや萬國の都にすくれたる大江戸は百万戸二百六十餘の公侯八萬騎の士大夫二千餘町は市町寺社倡優は數をまらず一日に何萬丈れすり小木をくはんとおもふも例の江戸自慢にして豆腐を秤にうけてくふ祇園守の紋付けたる上方者なごは駄吹噓を上るとわらふなるべしとり小木もれん木も同じ山椒ふそ伊勢そり鉢又備前摺鉢

○道中膝栗毛序

十返舎一九

箱根八里の長持唄に之猛き宰領の心を和らげ竹に雀は馬士唄に之鬼殺を爛せしむはその歌の德利酒呑や諸れ旅衣都をさして行がけれ駄賃帳を繰返し筆は建場に雲駕の息杖をしてゑいやらやつと書編たる東海道五十三次の記行に無滑稽と無旨の二割増重荷に僻言夷曲歌そ色が中おも

唯一夜鮮のめい盛替かけて商ふ戀の箱枕その有垢を宿帳の帖となしたるは空尻の竟無体あるをんの癖の間屋場もごきハハ頼ますと此本の鹿島立に序する事たり

○契情四十八手叙

山東京傳

千手觀音のさらなり薩摩守忠度は一本の手にさへ六彌太をどけて投のけたまへば袖も足が手ならばやとと翠簾紙に包れて捨られせせまじと誰を淡童子も大江山の骨牌場て手のほのぬとを嘆しよし紙離も實の藏又居をか手て手の空を哀むも理ぞありされば傾城をころそも手にあらずしく何ぞや故に今新手を盡きて其題を四十八手とよぶ是を以て則ち無手客の愚齒に授よと我に與へは誰なるぞ向にもせよ此一冊の四十八手がッてんのゆかぬ

○花風月春告鳥の亭

爲永春水

僕四十雀の不惑といふ歳なれど澤邊に鷺に異ならず野呂  
 里とまて家事に疎く戯作を鴻鴈の活業に風雅も洒落もあ  
 らざると人情ものを巧婦それが鶴に愛鳩となりて果なき  
 鳴を喜鳥との明鳥を筆果報の始と去今猶書林へ鶴に橋  
 渡しとはなりぬされば舞の一より算へて千鳥の壘に満る  
 中本山鶏の尾れあがく後を待たせ鷹れ山と積と積  
 翠の河より深き看客の御最負を空行雲雀の高く仰ぎ惠よ  
 供ふ一趣向を鶴うつらと翻案れど毎時初音の手がらはあ  
 く元來鶴の一盤に寐りをさます奇談も雉もさる兼たる  
 短才と譬にいふなる燕雀の鵬の覽をはつこいへ拙著の  
 外題をも呼子鳥の得意もありてや水鶏にあらて庵の戸

た、く知己さへ少くらずいつも著述を鶴鳩なれど稻負鳥  
 いなまがたくて夜を以て日につぐ鶺鴒のはやこいらへと鶺鴒  
 此苦勞鶺鴒之脚弱は作者の文盲そを都鳥は鶺鴒たちは鶺鴒に穴  
 を見出して高く伺ふ鶺鴒は目に笑えれんことはおそるれど  
 世活なれば鶺鴒つよく鳩に三枝は禮もありまゝ愛敬も在  
 まると小陵鳥を賞て日鶺鴒をえらゝ春告鳥を販元に贈り四  
 方よその音を傳へんと願ふのこ

○麥飯報條

風來山人

高うらうよのらう安うらうわるからうといやぼの時代は  
 ざとへにて今どきの御合點なされずひはばりませで二の  
 膳にすわり安札で棧舗へ上る賣人のやすり買人れかすり  
 やすりのすりと云事をまらねば今比は商賣のからぬとさ

る御方の御説法聞とそれま、早合點か、こまり子のとる  
る汁よりむぎめいの思ひ付南鐐一片六進が三進二一天作  
の御壹人前ゆもり上て見ればサアやすん、  
ろばんちがひうぬそと物のひけ物か但、又狐をつるひて  
馬糞でも喰はせぬかと御うたがひの御方もあらふがそこ  
がのれやすりのすりでのひての仕合うりての悦すたつた  
所が南鐐一片もうけさ所が五十の七十七みぢんほもれば山  
をなま頭巾と見せてやううぶりいかな御客も足ゑる、  
と御出被成てめしを出せコリヤ酒をだせヨウイ得意な  
らまやんせよ

○道外物語序

佛語に拈華微笑とあれご華を拈て莞爾と笑へば釋迦り迦

式亭三馬

葉も輪婆も妓夫も皆一般と思へとも腹を抱て我うら笑ふ  
と襟られて笑ふどの笑ひ様も差別あり撒屁れ音を聴け  
し姉さんの忍笑ひは振袖れ外にも漏らねざ山三笑は  
日本にまで音響を今又傳へて聞及べり凡て笑も多ある中  
にげら、笑ふは馬鹿笑呵々と笑ふと小説笑チホ、と笑  
とか輕薄アハ、と笑が空笑りんららとと勇者れ笑ウツ  
らうらとは軍書讀れ笑なり其笑をこる者は戯場の打諢な  
りこそ思付たるのべ鏡出まくらうの昔繪は好事家へのか  
笑種その可笑とた牌をして轉回なさまむ嘗聞だんまり坊雉  
子とけんけん鳴ばかり父は長柄の長者が娘玉屋れ花火を  
好まれ、幽王れ奥様から笑く三百つりをとるべ死苦虫れ  
先生も一たび此書を讀たまひ、笑えずといふと奇啼く

よさへ笑と、いかに郭公先初春の笑初に山より先へ笑た  
まへく

○客者評判記跋

式亭三馬

漢書に汝南の月旦評あり源語も雨夜の品定あり中上と評  
したる唐山の時代狂言を上上と和げたる吾日本の世話狂  
言は所謂俳優評判記の鼻祖もまた笠翁卓吾兩李れ梅梅よ  
く咬わけた劇在行と西鶴團水に肇りて自笑其頑も止たり  
後年其笑瑞笑と云的共意を續で評しけるが今尙自笑の孫  
に通と呼れ先哲いまだ看的の評論あるとを聞かず在下も  
一の好劇的なれば一時劇場に遊ぶの日意馬を戲門に繋ぎ  
心猿を戯房に放ち眼を東西の棧道も配り耳を兩側の棧柵

にといひをば尖柵戲合せて兩面の照子に侶たり梨園の打  
扮看的の介科形容に影踪の從がふ如く睨めば睨と泣けば  
愁ふ生あり且あり淨あり浪子あり兩脚打譚老旦刺小生よ  
り小旦まで皆それくの演劇ありて管奏曲の音なき而已  
みれを正面より眺むとさの看的人一同一に雜劇するに齊  
く劇子反て觀劇するに似たり素より脚色はえりざり見と  
り古實の見功者最負蓮さとの子でんばうのん太郎何ても  
三十八文字屋江島屋風も毫をとりすらりと並べて見立た  
小冊目けく客者評判記といふ因縁縁故それたため後序爾様  
○道行風の妹背筋 風來山人  
戀すてふ我が名はまた死立出る襟の縫目やはだ着のうち  
なれま故郷をふり捨て何國をあてどさだめなくかちて行



身と人のこの風の身に懸れふち深き妹背の二疋づれ生  
れ付たる數々のあし手まこひのはるごらぬ大推峠天柱れ  
原風門が谷うち渡りいどのうくたるけんへさの峨々た  
る峯をよそよ見て背筋海道とぼくとかざり出るぞうさ  
く見上さば遙の峰に生茂る木々の梢や鳥羽玉の夜  
晝わぬ所おも願えらまはすむとるや世上の人のわる口  
に花見風と浮名立身のたのまともいついかにさのふさけ  
ふの瀬どおはるあすあさつてやもえ出るくさのよそよぐ  
風さへもまや知死期の使ひかど世を忍ぶ身の一筋も千  
手の御手にけくくと杖とたのみし七九れ里四くわくわ  
んもんを打越て鳥のそらねや帯の關十四十六初戀の思ひ  
みだきま物心血泣れ酒のゑひまざれ縫めの糸れたまさる

に得ころびそめまころび寐れそのむつ言にひかはず取  
あはまたる誓紙のうらすかあい男とださしめてたとへ野  
の末山のおく虎ふそ野邊の足の毛や爪の地ごとくへ落ると  
もとなさはせぬとてしやんしたそれ言の葉がまみ付て  
わたしが背の入ぼくる苦勞する身のきき旅もみんあわま  
うらあみ侍た事こらへてやみのとふそへば男もとも打  
まや色親のゆるさぬ不義いたづら襟れ住居も叶はねばか  
く落ぶれし二人が中心はやたけにはやれども走らふにも  
飛ふよものならぬ身のかなまさとそぞろ涙よくきける  
がハア、まようたり誤たり實數ならぬ此身よも先祖の譽  
よ王猛が傍若無人と名を傳へ不思議を残り節穴よ恨をむ  
くひしためしもあり又水中うらんで磁石にあらはるの

徳あればゆびにひひられ灰吹の底のもくつと一づむとも  
 尸よ譽有明のほきぬ妹背の旅づかれいざや急がん夜明な  
 ば東まらと人やとがめん兔にのくに身の用心の腰眼や  
 雲れかけと一白さへけ加賀越中の國境ふんと一谷のかた  
 ほとり肚門寺とて名にまたま大師れ古跡ふ一拜を蟻のと  
 わたり打過て金だの宿にぞ三重着にけり

○鳥亭焉馬七絃壽詞

蜀山人

ことし桃栗三年柿八月をまたずあやめのさつき十七日野  
 見て字なごんすとかの矩をこえず人間萬事塞翁が焉馬  
 老人人生七十古來まきなる賀筵をひらくわれ四十年來の  
 知己あれば世の人のもてさやす七の字つくまでもか、  
 ばあらぬ所なれど八算でもいとむづか一さ七れ段何とた

くべき質草もな、つになる子が七ッいろは七言と柏梁の  
 詩にはむまり七文字はいつも八重垣のうたにかこるそも  
 く七十の賀のめでたき事七曜のうやくごとく七里が  
 濱の真砂のごとく春れ七草れごとく秋の七くさのごとく  
 七里にぎはふ鯨のごとく七瀬れ川のまさに至るがごとく  
 七高山れ壽のけず崩れず七百餘歳れ慈童れごとく七なん  
 のそ、の毛れ長さがごとくと天保れかぬれ九如をうさひ  
 太平樂れ巻物をひらく七年の夜れ雨そ藝者甚孝記の歌吹  
 海をまれば基太平記の七ッ目に宮城野まればがむかまを  
 思ふ吉原年代記は板元れ七もがりを悦び歌舞妓年代記に  
 わぎをぎの七變化を盡すふとに新作たと一咄と此道の開  
 山にして其門に入るものと七軒の茶屋に坐えて七越のお

いらんをまけごとく新造かふるの諸門弟七尺さつて師れ  
 影をふまざもとより花の江戸ッ子なればなまぬるき上方  
 もの七里けんはいよせつけずあたりを去る事七多羅樹  
 七衆七佛七觀音天神七代七の社七賢七叟七福神も照覽あ  
 きか江戸七代談洲樓は壽は浦島が七世の孫彦やまやご五  
 十六億七千万歳彌勒の出る迄生けつげ嗚呼つがもな長  
 生を力車に七くるまけむともつきま鳥馬馬のとま  
 ○浮世風呂大意

式亭三馬

熟監るよ銭湯やご捷徑の教諭なるとなま其故如何となれ  
 賢愚邪正貧富貴賤湯を浴んとて裸形になるは天地自然  
 の道理釋迦も孔子も於三も權助も産れたまの容にて惜  
 い欲も西の海さらりと無欲の形なり欲垢と梵臈と洗清

めて淨湯を浴れば旦那さまも折助孰が孰やら一般裸体是  
 乃ち生れた時の生湯あら死だ時の葬濯にて暮に紅顔れ醉  
 客も朝湯の醒的となるが如く生死一重が嗚呼ま、ならぬ  
 哉されば佛嫌の老人も風呂へ入れば吾しらず念佛をまう  
 色好の壯夫も裸ふなれば前をおさへく己の恥を知り  
 狂き武士は頭あら湯をかけらきても人込じやと堪忍をま  
 もり目に見えぬ鬼神を隻腕に彫る俠容も御免なさいと  
 石榴口も屈むは銭湯は徳ならずや心ある人に私あれぞキ  
 心な死湯も私さし譬ば人密に湯の中おて撒尻をすれば湯  
 はぶくくと鳴て忽ち泡を浮み出す嘗聞敷れ中の矢二郎  
 へいらず湯の中の人として湯のおもこくをも耻さらめや  
 總て銭湯も五常の道あり湯を以く身を温め垢を落し病を

治ま草臥を休むるたぐひ則仁なり桶のお明のござりませぬ  
 ぬると他は桶も手をかけず留桶を我儘おつうはず又の急  
 て明く貸さぐひ則義也田舎者でござる冷物でござる御免  
 なさむといひ或の早いか先へと演べ或のお静にた寛り  
 なごいふたぐひ則禮なり糠洗粉輕石絲瓜皮にて垢を落し  
 石子で毛を切るさぐひ則智なりあけいと一へば水をうめ  
 ぬるんといへば湯をうめるた互に背後をながしあふたぐ  
 い則信なりかゝるめでたき銭湯なれば此に浴する人  
 も水舟は升陸湯の桶方圓の器に随ふ道理を悟りて湯屋の  
 流し板の如く己が心を常に磨きて詣の垢とたける人間一  
 生五十年二度入の御方あるとも御一人前の分別あるは湯  
 屋の張札の如く一心足らぬ萬能膏あり馬鹿に附る藥のあ

らずも走馬の千里膏鞭打て呉れる交の無二膏あり口中散  
 を繚せば忠孝一切の妙藥二親の安神散兎角梵腦の火の用  
 心と湯屋の定書お以たり心に驕奢の風立ば家私は何時に  
 くも早仕舞なり五倫五体は天地より預物なれど大切の品  
 を御持参物なるを色と酒とよ魂の失物不存我ら招く禍  
 の他人は一切存不申事ならずや名聞利欲の喧嘩口論喜怒  
 哀樂の高聲御無用此文言をまもらぬ時仕舞湯に入損ひ  
 モウ扱まえたといはれて後悔手巾を咬とも益なまあべて  
 世の中の人心と錢湯の武に等く善惡に移り易き物なれば  
 權兵衛が褌褌りら八兵衛が羽二重に移り田舎の湯具りら  
 令室の絹布へ移るさのふの襦袢一枚は疊の上へ脱しもけ  
 みの重着は棚の上へ脱に等しく高貴貧賤の天にあり善惡

邪正之已おのれが招く所ところなり此意味こゝろをどくと悟さとらば他の異見いごと  
 朝湯あさゆの如ごとく已おのれが身みに染しみわたるべし唯一いつた生なまれ心こゝろの軀みを借かり  
 切きりの戸棚とだへ納なめ魂たまに錠じやうをおろまて六情ろくじやうを履違はきちがへぬやうよ  
 堅かたく相守あいまり可中事こしと神儒佛しんじゆぶつの組合あひぎやう行事じが牡丹餅ぼたんもちやごの判はんを  
 居すていかいふ

○青樓せいろう晝夜ちやの世界せかい錦裏序にしきうらのぢゆ

山東京傳

一日いちじつ書肆あま馬唐丸つたのまら來きたりて曰いはく例れいの小冊せうさつの按あじとありやなまや  
 と予答よこたへて曰いはくまたあるく素履すゐな道念だうねんみる様ようお安請やすけ合あひ  
 ようけがひてト執筆あてまた處ところが無ないもれと錢金ぜにとよい思案あんな  
 り蓋妄作けだしむだまの茶表紙ちやひやうしも年々ねんねん穴相あなあひ似にて歳々さいさい年々ねんねん趣向しゆかう新あらたし  
 うらざきば一つぐつと捻ひねくみた青樓せいろう晝夜ちやの世界せかい夜よるれ景けい  
 色しきの花美はなというつて變かはつた按あじれ小冊せうさつ此奴こやつは一ひとツ新織しんなら

めと其儘まゝ錦にしきの裏うらと題だいす而已のみ

○太平樂たいへいらく卷物まきもの序しよ

風來山人

やまど歌うたはたけ色心いろこゝろをも和やわらげ鬼神おにをも感かんせしむ男女おとこの  
 中なかをも和やわらぐるは歌うたなりさきば犢鼻たひら禪ぜんもて、らといへば  
 歌うたもよまれ下紐したいもといへば雲くもの上人うへびとの口号くちごうともなりなん  
 りまものい言い様言さまい品あかにて仇あだま仇あだ浪寄なみのよてと返かへる波淺なみあ妻船つまぶねの  
 淺あさましやといへばさも麗うるはしく聞きゆとなん取とりもなをさす今いま  
 の世よに船ふね饅頭まんとうどもて際さかいを此道このみちの蒼妓そうぎ肥滿はいまんくの阿千代あちよて  
 ふもの新しん飛とてふ白しろ札子ひやくしおまみへて生活せいかつの不祥ふさむを説破せつぱり浮う  
 世よと下和げわが替玉かへたまとありて女閨によわの寓居あかりよ目下まのあた見み一ひと雨瓦あめ三舍さん  
 の荒唐たうたうを口くちかたままも言いたるを慣熟かみじの奴やつこが供侍どもまの聲高こゑたか  
 に語かたりしを予物よもの蔭かげより立聞たちきまが言葉ことばれとなひひくまとい

へごも見識は水道尻れ火れ見より高く彼泥郎が得難に  
たる跡婦傳の趣にもかさく劣るまじと筆にまのせてあ  
いつけ太平樂巻物と号す希は四方の君子鼻の孔の行届さ  
る所と瘡深い奴か脱漏たる事も多あらんと万事茶にして  
見たまへかまど云爾

○書畫帖序

蜀山人

口より出るを詩歌といひ尻より出るをかならどいふた  
かならのとくささにあらず詩歌あまたたわるぐさきあり  
唐一代を四ッ割まして初盛中晩の階子尻といひしも盛唐  
くさきの偽唐くさいれとアウノをひりちらして今と放  
翁齋のするま尻をこく世とはなりぬやまどうたは馬鹿律  
義にしくならのこのおなられ外は草庵集や新題林をにぎ

り尻れまざりつめておもしるくいおろしくい尻玉れやう  
な放屁をいたゞくもかりこゝに狂歌こそおのりたも  
のなれ師傳もなく秘説もなし和歌より出て和歌よりか  
しく藍より出ま青瓢箪それ蔓よもにはびこりて性とせん  
なり瓢箪の丸のれ、字をうくぱうり二百五十の同庵がや  
色もちをやく事とはなりぬいらざる老のにくまれ口ふ、  
らで筆をとめたのらほり自譚くさいとくさいもれ身いら  
ずとでもちんとでもいひなさつ

○麻疹戯言跋

式亭三馬

北川氏船よて契約の事と書たる招状の竈と姥の話説小殘  
りて二十八年のむかまゝに廢れごもかせては後は我が  
身に請合ふ麥殿の歌の徳は今茲も麻疹の流行に後れずさ

れば麻疹と養生にあり初發は熱の瘡言と醒ての後の御了  
簡と寺岡もすけ合ふべけれど治疹ては后の不了簡と了竹  
がしる處にあらす身體髪膚を筍と換る口に孝行をつく  
して親に不孝なるをしらず長生不老を經に縮るは口に初  
物を食つて生延る味ひをえらざる也鰻の樺焼三串の四く  
しにくしと思ふ己が身を捨賣よして裸百貫丈夫につり  
つて五十年人間わづり二百孔の價に御登人前は命をあや  
まりは歎えしき事ならずや予頃日麻疹と罹りて營生を休  
るの間箇れ劇文を著して題するに來舶れ書名を借り花陣  
綺言れ響を採つて麻疹戲言と題號しふれを弘るに彼杵  
と鈴の如くなさんとすしあはれぞ呪術は猴の人真似に  
して多羅葉のさらぬがちなれば世間の善癖には引あへ

都... 山世堂藏版

て悪評をするものあるべまさらば噴嚏をそるれそにく人  
の噂も禁物も七十五日のそゑを待何と云爾  
○戲子名所圖會序  
大極靜てよりこのあふ天よ三光の觀相あり地に三形れ絶  
景多し遠色漢土の更にもいはず須磨明石の月影は引窓よ  
り視るに難く吉野龍田の花紅葉は鉢植にするに由なし口  
に一杯れ麥飯を喰ひ足に三合れ肉刺を踏出さ辛うじて山  
川よ遊ぶとみふども嗚呼そを何の益かあらん近く是を求  
れば顔み眼鼻の名所あり脊よ七九の炙跡あり鯛の名所は  
庖丁家お稱せられ齒の名所の葛西に高し歌人は居ながら  
名所を知り偏目は居ながら眼醫者を知る巨燧辨慶門の犬  
尾をふりわけの雙六ならで京へだに上らざるは痿痺に劣

曲亭馬琴

東八大家戲文上編乾 十六 山世堂藏版

るの譏ありども居然とて八方を辨じ安然とて四海  
よ遊ぶもの皆書畫の功なりこゝを以て近ごろ世に行はる  
る都名所圖會小傲ふて戯子名所圖會三本を作る所謂盲目  
れ撈書といへとも蛇に怖ざる田夫山妻はじめに此書を熟  
覽してしりして後戯場に遊ば、彼一番叟より見ざるの悔  
なあらんもれりよつて繪の事と素人落を後みせざる歌川  
豊國が筆を借て賣物に花を飾りまうも招牌又偽りある鶴  
屋が本店の正戲箱に投じて一番景氣を見る事よなん  
○とこいり嗽石香口上代作 風來山人  
トウザイ、抑私住所の儀八方は八ツ棟作り四方は四面  
の藏を建んと存立たる甲斐もなく段々、の不仕合商れ損  
相つゝ死濫團扇にあふぎたてられ跡へも先へも参りがた

然所去御方何ぞ元手れぬ商賣思ひ付いやらおと  
御引立被下ははまがきの儀今時は皆様と能御存れ上なき  
ばろくすは野夫の至かり其穴を委く尋奉れば防州砂に  
得ひを入人、のなもひ付て名を替るばありて元來  
下直の品よて御坐いへごも畢竟袋を拵いれ板行をすりい  
のあの、もの、よて手間代に引けい依之此度箱入に仕世  
上の袋入の目方二十袋分一箱に入御伺ひ勝手よろしく  
袋が落ちり根枝がよごれるとややうなへちま事無之  
様仕かきでせまめる積よて少ばかり利を取下直に差上  
い尤藥方の儀私は文盲怠才よてなんにも不存いへごも是  
も去御方より御差圖にて第一に齒をえろくま口中をさは  
やかにしあし色臭をさり熱をさまし其外まも、さつた



富士れ山得ぞ功能有之由の藥方御傳へ被下し應かさぬ  
 ろのやぞ私に夢中に其外の功能をさすも害にもな  
 らずまた傳へらるた其人も丸じ馬鹿でもなくいへばよも  
 や悪くそあるまゝと存教の通藥種をえらき隨分念入調  
 合仕ありやうは錢がほしさのまゝ、早々賣出す御つひ  
 被遊いて萬一不宜いひだいなし御打やり被遊いても高  
 のまきたる御損私方は塵つもつて山とやらにて大に爲に  
 相成し一度切にて御求不被下しても御恨可や上様は無御  
 座し若又御意入スハ能と御評判被遊被下しへば皆様  
 御鼠負御取立て段々繁昌仕表店罷出金看返を輝かせ今  
 の難義を昔語と御引立のやぞ隅りらすまで何らつと  
 奉希上し其爲の御斷左様にッワチくくく

○雙蝶記序

山東京傳

此物語稿をとりて人に叙を乞ふと思へどもかゝる拙作を  
 ばば讀てくくる人も有まじと頼まぬ前より先ぐりをまて  
 自ら緒を解んと思ふにこれを漢文又述べ之乎者也の置  
 所酢の茹弱れと面倒なり書得た所が餅屋の餅又あらず素  
 人こしらへの柏餅皮が厚くて味ひなまゝと云むこそを和文  
 又記さんとするより一字一語を論ずるにさへ過去未來現在  
 なごと三世因果の業をさらまざるに文を淨瑠璃節に語るや  
 うにてかたはら痛き事多まゝと僕が不文を譏からん蟹と甲  
 に似く穴うるさき世間舅やと思ふにほけ舅といふ字を縁  
 又て此草紙の婿を尋る嫁に假令て見るに繪は則ち顔姿  
 なり作は則意氣なり板木彫と紅白粉なり摺仕立は嫁入衣

東 八大家文選 卷之九 出四堂藏版

裳なり板元と親里なり讀で下さる御方縁と婿君なり貸本  
屋縁はお媒入なりさて顔形にたとふる繪と歌川豊國の争  
なればや一分なり板本彫の小刀にて紅白粉の化粧もよく  
摺仕立の嫁入衣裳も不足なく板本の親里もよくをはなれ  
て随分安賣れ嫁なれど肝妻れ意氣にたとふる作が愚にて  
まうも田舎言の其うちに都言を横睨よ言ませと聞ぐる  
きと多ければ讀で下さる婿君のた氣よいらぬがちなるべ  
し所を貸本屋縁方のお媒人口よてのやすくの娘がござ  
る顔容は云分なま心ばへい少ま愚な生なれど其かひりに  
は舅姑の言を背ず婿君を大事にして律義一ぺん所帯形氣  
の娘でござる先見合をまて見たまへと拙を覆ひあしきを  
好に執なして勸めこんで下さらば縁ご得さ此娘もよき婿

君よありはくべま郡猪も伏猪といへば優く馬鹿も結構人  
といへば聞えがよし是則ち力と頼み奉るお媒人れ貸本屋  
縁の言なしに依る所なり然則は板元れ親里が喜び多く祝  
儀れ小謠千秋萬歳れ千箱の玉をまためて追摺の御注文  
冊々の聲を樂むに至るべしかく思ふ所をありのまに記  
して以て是を序とま物前に残り本ののへると云と忌詞六  
福帳をためてたう開きやすといふ  
○ 風流庵報條代作  
式亭三馬  
大隱は市にあり大慈と僻地にありて哉何れ隠居某れ隠居  
と近來隠居と世に出てとやる事夥し本よも草にも隠居の  
名ありて各好事家の寵を得たり田園れ閑を賣り林泉の景  
をあたなひ我のら既物場ととる氣はなれど人の訪來る

東 八大家文選 卷之九 十九 出四堂藏版

に随ひ風雅でもなく洒落でもなまぜせう事なりに慾ばる習  
 俗一世一度の名残狂言再び舞臺を踏にひとく竟に隠居も  
 も二度れ勤をなしぬ折みれは金馬門と伯仲の際から金龍  
 山に隠家に住めば隠居よのくれなき何が一に別荘あり  
 春の櫻も秋の萩も四季に眺めを庭にあつめて居ながら拜む  
 観音の裏に田圃の眺望して一目よりすむ千束れ郷うそを  
 筑波に山こそ見へね伸上りあば吉原の尊女そこらと手よ  
 とるごとしされば雅となく俗となく物數奇したる庭を見  
 んとて來侍とふ人ひだもだらず頃日あるじの需めに應じ  
 て此邸宅を號るに樓臺館閣もとよりあたらず社居洞窟は  
 かたくる一寮坊觀室と坊主くさく軒亭齋園ありふれたり  
 盧と舍の夏の外套めけば庵と一べいの堂せううとひとり

捻つて監みるに伊勢の産の伊勢屋と言越後の人と越後屋  
 どよぶ是をかもへば穿つに及ばそ風流こに止まる故風  
 流菴と號けたり後園に茶室の數々今日庵を始とて窓  
 と稱一窓と唱へて藪の内に至る迄か一ことにあまたあ  
 り詫たる茶の湯を玩び寂たる閑栖を愛ま玉の日に究め  
 月に定め所によりて貸まるらそ月雪花をながひるにも腹  
 さと一くて之面白くらず何か趣向のあるべ色事を思ひよ  
 りさる手打そば味ひは精に製まて器之清きを撰みたり蓄  
 麥を好ませ玉はぬ方には門前へ人を走らせて名酒料理の  
 酒池肉林菜飯に田樂うなぎの蒲燒喫茶一服亦一椀一盃々々  
 々三杯さげん下戸こ上戸の御隨意に何でも彼でも取ませ  
 奉れば茶湯を茶漬に換るとも厭はぬ處の風流庵彼れ大隠

東 八大家 文 上 乾 廿一 古 町 堂 藏 版

の在とぬふ市の街の經道なる僻地に欲ばる此庵主を花に  
の花に隠居とよび月には月隠居と稱すすべて四時遊  
觀に隨ひ何れ隠居と片よらず廣くは庭に風流庵と只にぎ  
はまう駕を賜えらば庵主の幸ひ甚まからんといふ

○神靈矢口渡跋

風來山人

稱ぬ色澁柿を笑て曰汝我身れ澁さを恥ず澁柿答て曰汝も  
澁を扱ずんば澁く我も澁をぬかば甘うらんと善惡の本不  
二なり一日吉田冠子來りく淨瑠璃の作を請ことまきりな  
りされば言は蛇に畏す小戸はば餅お逃すと不稽無上れ  
筆任せ只初段れ切三段目の口れみ予が筆よあらず其餘の  
闇雲に綴合せども今をいじめの作者れ巢立しむも初日れ  
急なきば引書を閱に違あらず校台も足されば其誤多あら

ん澁のぬけざる澁柿の澁き所の容いたまへ寅の新春中旬  
作者の甲折福内鬼外まじめ成て誌す蜀山人

○飲酒法令

蜀山人

- 一 節供祝儀に之のむ
- 一 珍客あればのむ
- 一 肴あればのむ
- 一 月雪花の興あればのむ
- 一 二日酔の醒を解ふはひとりけむ
- この外群飲快遊長夜は宴終日の飲を禁ず童謡にいほくか  
まへその標酒のんで狸々あならんす下心狸々よくのめ  
とも禽獸をとなれず人として禽にだも鹿猿へけんや

東 八大家 文 上 乾 廿一 古 町 堂 藏 版

○傾城籠

五戀の突出しより名残のうらの季明まで百員が百人ながら  
 買色の手柄おなじのらさ裏移りの床花に月を結び初  
 章にと打越しのさしをもつらず懸連れて馴染の甘味は先  
 達の發句を待たず脇起りの口舌には屏風れうちの十五點  
 加ふべし揚句の終よと雨に風にうろを通も此道お遊ぶ人  
 觀念の第三にまて玄妙切れ妙あると他れた了簡に及ぶべか  
 らず表八句よ紫竹の川竹堤八町に口八調をくらべ月花の  
 坐よ中坐をゑらび予が拙なき筆句をもて小菊れ折端に評  
 記ま彼の俳諧籠よ比して傾城籠と題を購は買の横訛よ！  
 て女郎買といふにひとし蓋似た山半歌仙の入句を愁ひ色

をも香をも知る人にまさせる

○心猿辨

心の猿の小天地の間に孕れく十月にして生る獸猿としり  
 らず其色赤くして火に類し其形圓まて下尖れり肺肝をも  
 て佐と玄牌腎をもく臣と一膽胃膀胱包絡をもて家とす或  
 は善よして悪よ馴易く或は悪にして善に飯を喜怒哀懼愛  
 悪欲の七情みな此ものに奮發せられ春と花れ下に歌ひ秋  
 は月れ前よ嘯き夏は樹れ蔭に睡り冬は雪の窓に吟じ観よ  
 向へと物書れ鏡に對へは貌つくる色に溺れて城の傾くを  
 いらざるときは淨藏も治玄難しとす酒を吸ふとさ蛇のご  
 とくにて座の長あらん事をかもひ獻とき蜂に似て味ひ蜜  
 なりといふめり衣はいろよきを羨み食は美味を貪り錢あ

曲亭馬琴

るときに人を見るとき塵芥のごとく錫竭て人よ媚るとき瘦  
 狗よ等々下間を恥くいよく學ばず上智を誹くますく  
 愚なり道を聞けば必ず笑ひ諷るときは譏ると思へりこの故  
 に使ひ難しく悦し易く馴易くし親を難し財の爲に羞を  
 忘れ怒り乗し死をだも辭せず勇きと谷を出る虎に似た  
 るも勢竭くは家を喪ふ猫に類す利に走るとき捷徑より  
 て譏を思はず慾に迷ふとき正路を枉て誑を事とし浮める  
 雲の富を羨てと枝又尻のけて沈吟し流る、水の月を把ら  
 んとしてと深き淵に臨て危を去らず朝四暮三に謀られな  
 がら五十歩をもて百歩を笑ひ養由基が弦音を聞てはじめ  
 て宇宙に敵あるをしる冠して楚人と陋められ箭を抜て魏  
 將歎く臂は長し李廣が弓衣は黒し張史が宅周穆南征して

君子化し越女を試て袁翁走る元忠よ給事えて主人に怪  
 らるる昭宗よ寵せられ羅隱詩を題し三輪山よ晝寝して臂  
 を執られて歌ひ阜嶺河よ群遊て形を隠えて嘯く美作の國  
 より参りて鎌倉將軍の所に舞踏り正源寺の鐘を鳴らし  
 て官軍九院の衆徒を催促を麻呂と呼れて歌人めりま  
 と云ときはらの字を略せりこれとこいそのたちばなみか  
 のみこ。木實鳥そやのみこ。たもとまひちんご異名多かりま  
 た唐山には野賓。山公。巴西候。白袁公。石媚乳。林泉。處士。閑雲。處  
 士。なんごくさ。に呼びのへたりこれらの山林をもて家  
 とま或の人に養れて猿女。神の迹を追ひ猿樂の名さへ起  
 したれごも絶て怕るべきものにあらず只怕るべき心の  
 猿のみさればにや昔聖人仁義禮智忠信孝悌の八陣を布て

これを狩どらへ金仙又地獄餓鬼畜生修羅の四趣を説てこ  
色を懲らし神明亦眼耳鼻舌身意の六根を示して彼れよ不  
淨を想ふとを許さず悲しい哉人家山林れ猿れみを識て己  
が心の猿をいらす巴峽又月落て三聲腸を断と云も悲猿族  
客に心なく心猿相感じて爲る衣襟をうる得すのみ猿よく  
われを慰めて歡えわれに遇て哀しわれを激しく憤を發さ  
しわれを慰めて樂ませずはじめわれわが心の猿の在る  
みるをえらさず彼が爲る擦役せらるゝ事四十二年やうやく  
にまぐ半拉ぐとを得りこゝをもて色に溺れず財に迷ず  
歡ぶべきも歡ばず哀しむべきも哀まず竊に世塵を厭ふと雖  
も彼れまだよくも悟らず徒ら意思を費えて著述に耽らま  
動すれば無用の辨をなし事を誤るの譏を讓す物えらでも

られるが如くなめげなるは皆是彼が所爲なりけり夫錦心  
繡口の才人すら千季句を煉て僅に佳對を得たりとなんの  
ゝる故又文人多くと子なし思慮の命を傷ると酒色より甚  
しといふある相如が絃断て白頭の吟空しく興嗣が髮枯れ  
く千字文成るいよ一の俊才嗜慾の爲に身の衰を忘れま  
に似されども坐に虚名を高くえて兒女を悦ぼそる類にあ  
らず文章一家をなして後世の師たり先哲に耻て後生を懼  
れわれわが色れふの非をしるべきと面愈く赧なりて更  
にする所あり限ある才をもて限なき書を著え命を筆のご  
どくせんは以と愚なるわざなるべし月日の逝と速よして  
墨と共に摺滅え一旦硯の水竭は悔とも争及ぶべた。とぼの  
りにしてけふも暮しは猿は小鼠に伏え心れ猿は名利よ

役せらる 閑に背を曝して 虱を捫んとせれども得せず 嘆息  
まてみづから記し自ら注しもて己が誠とすと云

○猿寺禪師七十賀詞

蜀山人

人生七十古來稀なりといひし詩人も五十九歳で食傷まて  
うせ七十從心所欲このたまふ聖人もたつた三年矩をこえ  
ず八十年胎内にゐられよ老子のお袋と迷惑なるべくた  
か七十九とやらで跋提河の泡とさえし佛と常在靈鷲山と  
ていつまでもまめ息災とさくも片便にて心もとなしこ  
よさる寺の大和尚は七十の壽の文をつくれとさる人のも  
とめいなみがたく千年は鶴萬年は龜松竹のと死はもふる  
めろしけれとの佛説は那由佗阿僧祇五百塵點劫四十六  
億七千萬載彌勒佛のせり出まにさし出しの蠟燭てら

とはなのささへ出るまでは高野六十四年は少年蜀山人の  
請合なるへ文化九のとりみづのえさるの尻も大晦日に  
ちのさ比えるす

○放屁論自序

風來山人

屁てふもの、ある故にへの字も何とやらをかしけれど天  
に霹靂あり神に幣帛あり鷹に經緒有船あり草に女青  
あり虫は氣鬻あり狐鼯鼠の最後屁は一生懸命の敵を防ぐ  
人とまて放ずんば獸にだも如ざるべけんや放たり嗅だり  
屁ふる君子ありといへば強こを賤まむべりらず今評判  
の撒竄漢論より證據兩國橋

○通言總辭

山東京傳

我嘗くいへることあり青樓は我爲の雪隠なりと夫如何な



れば持たが病の腹痛に惱み金屎を放らんが爲尻をほり立て此廊も通と繁さが故なり若貧客我尿を喰は、鷄ち黄金の蜚尿とやらん一日例の長尿に退屈れ餘り此妄作をなまて硬尿の堅をしてびり尿のずるきに和げ世も其尿の撒糠を傳ふ通客といふとも我勝を覗ずして何ぞ尻の穴の廣とをいらん吁尿が惘に非ずや

○十八羅漢圖讀序

蜀山人

大明の所帶崩一藥連の和尚たち十八羅漢の圖を畫死てそれ次れ羅漢く順れ舞の偈頌ありそも讚だやら何だやら面白くもなんともな片手もならずてうちくあなき笛のあはくまづ一棒をふりあげてつふりてんく天竺の子ども遊びの遊戯三味ちこ流行にえおくれたれど放

下師れ小刀のみ込をかたれ聲聞根性あな二九の羅漢やく

○雜談紙屑籠序

十返合一九

田舎の出合馬れ脊を膝に履ざれば摺みえその愁あり飯盛の年明玉の馬に乗ざれば本れ土はぜりに歸るの悲もあり遠國邊鄙の人といへども苦の世界は還れず都會の人は更の事にまて兎角命れ洗濯せんには少まといへば稍一盛旅籠屋れ飯を喰ひ蒲團さて寐にはたらく雲助もまぢはる旅中のたれまよまくみどなりあゝに雲水といふ風來人普く諸國を腰掛よして至らぬと云所なく道路も見聞れ珍まきことあやしき事又耳を取て鼻ろま事かの雲水の書集ま反故の中より誠にさとい省きて陸ばつうりを紙屑籠と號侍りぬ

○坐敷藝忠臣藏序

山東京傳

寒中の鮫鯨吹雪れ中の河豚汁とはきでんの事と稱羨せし  
 冬籠に戯作の新板御らんにこれんと金屏の松の古枝をさ  
 つて圍爐裏にくべちぢんで、見やば、んつれてと麥つ死  
 歌れ麥茶をすより安行燈のあかりをてらして此長れ夜を  
 まちくど起て居てもあはぬ眼鏡や鼻得ご夜目がさかね  
 ば自笑もおろおもひはいさる讀本なれど八文字屋のそ  
 ばへもゆゑのす一文字屋は智慧もでねばこつてと思案よあ  
 たはずと烟草でううく考ても獅子録石烟管の火皿とけ  
 るばかりで趣向はううまはず得とんど案じよ月の山しな  
 よりと一里半息をきつふる力彌のとく文箱もたせて版元  
 催促の毎日なりごふで虚から出た實でなければ根とど

げまいと明日あさつてといひのべる一寸のがれの萬八を  
 開や伊賀屋氣の長い版元も勘右衛門袋は緒がそれて自身  
 に馬を乗出ま節季師走の賣物の一日ちがへられこづ、ち  
 がふと理屈の詞づべなるかなだんくあやまり入まいた  
 ど地口でもなく作でもなくまやうとあしに書綴種本それ  
 へおわたしやそ自身に氣をつけ校合あれとなげやれば版  
 元はにこくまがつくんがてん全部上木をるまでは衣魚  
 よも喰さぬ此種本と懐にして販りけりあゝる手詰の作な  
 れば御めんいへたはいく



早稲田大学図書館

011688985660